

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第42巻第1号 二〇〇六年七月

《翻 訳》

アルフレート・デーブリーン著・岸本雅之訳

『ポーランド旅行』 「油田地帯」

山々は小さな炎におおわれている。

南方へ向かう。そこには、カルパティア山脈の北斜面に沿って、ラーバ川とチェレモシユ川間の四〇〇キロにわたり、油田地帯があるのだ。ポリスラフとトウスタノヴィツェが石油産業の中心地だ。耕地の多い、肥沃な平野を走ってゆく。草原、切り株の残った畑、黒やまだらの牛の群が現れてくる。馬たちが栗毛の元気な子馬とのびのびと走っている。緑野のところどころに白い斑点が見えて、動いている。首と黄色い口ばしを高くもたげて、鳴き叫んでいるのはガチョウだ。家畜の群れが現われては去ってゆく。牧者は白い亜麻のズボンに、黒の毛皮帽をかぶっている。ウクライナ人だ。彼らの小さな農場や、滑車のついたつるべ井戸が点々としている。素足に、花模様のゆつたりとしたキャラコのスカートをはいて、白いスカーフを首の下でむすんだ農婦が、滑車輪の輻に手を入れて、水桶を引っぱり上げている。ある駅で、まだ幼い男の子が列車の後を追っ駆けてくる。別の駅では犬が吠えていている。藁を巻きつけられた小さな駅の給水栓がおかしい。その大きな苦しげな栓の口先に、水滴を逃がさないように、バケツがぶら下げられているのだ。しだいに丘陵状に勾配をまし、樹木が多くなってくる。紅と黄色に燃え立つような樹木が続く、時折その間に、深緑の重々しい針葉樹林が見える。ストルイはもう過ぎた。レムベルクから南へ急行列車で二時間以上走り、列車はドロホビチ(二)に到着する。

雑踏する駅。二人の農夫がえつちらおつちら、覆いをかけた籠と袋を運んでいる。ユダヤ人たちがレールを跨ぐ時に、後手に黒い長上着を持ち上げている。向かい側のプラットホームで、男が口に両手をあてて、「エツティンガー、エツティンガー」と叫んでいる。出口では改札をしていない。駅を出ると、「旦那、旦那、馬車はいかがですか」と声がかかる。そこには、一二台から一五台の一頭立て無蓋馬車が並んでおり、御者たちが、出入り口から出てくる人を誰彼なくさし招くように、鞭をふるっている。「一ズウォティだよ！」私はこれらのおんぼろ馬車の一つに乗る。御者は長いこと出発せずに、また他の客に声をかけて、誘っている。それから、さも不機嫌そうに、

ガタガタとよろめくようにして馬車を走らせる。しばらく平地が続いてから、上り道になり、でこぼこの街道に入る。すると、信じられないような家々が姿を見せる。そこには村があり、長い通りはぬかるんでいる。そして、こけら葺きの屋根で深くおおわれた、小さな木造の家屋が並んでいるのだが、それらの壁の多くはしっくい仕上げをされ、彩色が施され、薄青色や黄色、ばら色に絵が描かれているのだ。張り出した緑色の屋根の多くは木の柱で支えられている。それらは円く円柱に削られていて、中には、素朴な装飾がほどこされたものも見られる。途中、派手な色のスカートに、折り返しのある黒の長靴をはいた農婦が二人、きびきびと、どろどろのぬかるみの中を歩いている。街道は次第に平坦になる。左手の通りが人と車でごったがえしていて、そこを入ると、大きな広場に出る。

市が立つ広い方形の広場。屋台店と露店、馬、馬車、連なったたくさんのお馬車。そして、それらすべてが、泥や藁、塵芥、くずの中に埋もれんばかりだ。その塵埃の中、一列に並んだ台の上に、色とりどりの反物が広げられている。屋台店にはスカートや下着が吊られている。その後ろでは商人たちが、男も女も、大声で雑談している。ユダヤ人だ。ドイツ語の名前をもったユダヤ人ばかりだ。汚い服を着て、へなへなの帽子をかぶった商人たちが、広場の平屋建ての建物に面したところに集まって、何やら話し合っている。ひどくすりきれたカフタンを着て、ぼろぼろのズボンに、縫い目がほころんで口の開いた長靴を履いた、腰の曲がった、不潔な老人たちが、木の枝で地面のごみ屑をつついていて、長い象牙色の髭を生やして、つばが半ばすりきれた、穴だらけの山高帽をかぶった一人の老人が、太い指を動かして、ぶつぶつ言いながら、物乞いをする。その後、斜視で、髪が乱れた、ひどく醜い中年の女が、広場の雑踏からやって来て、物乞いをする。それから、幼い子をスカートにくるんで抱いた、少し若い女がやって来る。それから、裸足の少年。それから、つばの広いソフト帽をかぶった男。彼は大きなリングをか

じって、咀嚼してはペツと口から皮を吐き出している。「何かください」。「さようなら」。みんなイディッシュ語でぶつぶつぶやくように言う。

このマルクト広場の真ん中には、時計のついた四角い塔がみつともない姿をさらしている。塔には教会も付属の建物もなく、ぽつりと立っている。胴体をもぎ取られた脚さながらだ。ここは砲撃を受けたのに違いない。塔の足元には、今なお壁がそびえ、その上部にはしつこいと壁紙の残骸があつて、部屋の壁だということを示している。だが、部屋はなく、その下に瓦礫の山がある。これは市役所だった。戦争前に、建替えのため取り壊されて、戦後、手をつけることができずに、今も廃墟のままなのだ。赤煉瓦の教会のある右手には、広い通りが走っている。通りの真ん中はぬかるんでいて、それがずっと続いている。その両側には立派な樹と、まずまずの建物が立っている。公的なものらしい建物の前に、記念碑の台座だけがある。これはポーランドの国民的詩人ミツキエヴィチのものであった。数年前、ウクライナ人たちが進撃してきた時に、彼の胸像を打ち壊してしまったのだ。

ところで、塵芥と見苦しい塔を越えて市場を下ると、横丁がある。恐るべきところだ。これらの横丁と「家屋」を見ずして、悲惨がどういふものか、知ることはできない。それらは家ではなく、家の残骸、仮設小屋、納屋、あばら屋だ。ガラスのない窓、板を張った窓。まともな屋根のない家——荒廃したバラック小屋が密集している。中には煉瓦の内壁をもった地下室があるものもあるが、洞穴のようなしろものだ。そして、どの穴蔵もぎゅう詰め状態だ。この悲惨さの真つ只中に、白いしつこいを塗ったばかりの一つの大きな建物がうとましく輝きを放っている。これは彼らにとって、ウーリー<sup>(三)</sup>押さえの砦なのだろうか。これはシナゴークだ。この建物も老朽化していたが、修復されたのだ。だが、修復すべきではなかった、と私は思わずにはおれない。これらの建物はとつくに取り壊される予定だった。そのように審議され、決定されていた。そこへ戦争がおきたのだ。それで、いまや戦争の本

当の犠牲者たちが、穴蔵の中で朽ち果てようとしている。耳には聞こえないが、戦争の大砲が彼らにむかって轟き続けている。目に見えない戦闘機を避けて、避難壕の中で、多数の惨めな住民たちが、一日一日をきりぬけながら、すさんだ暮らしに甘んじているのだ。

事情の分かる人たちに、懐疑的に尋ねてみる。「この人たちは本当にこんなに貧しいのですか。ひよつとして、彼らは不潔さに慣れてしまっているのですか。ここを出てゆくほうが彼らには良いのでしょうか、そのようには望まないのですか。」

「一〇パーセントか一五パーセントの人はしだいにそうなってしまうかもしれませんが。今では、現状に埋没してしまつて、それ以外のことは考えられないのです。でも、他の大多数の人たちはというと、選択の余地はまったくありません。動けないのです。」

昼、ぺてん御者に乗せてもらい、下の方にある製油所へ行く。この地では御者はぺてん師と相場がきまつている。しかし、数週間の間、これらの貧しい人々の生活にふれてみて、私はぺてんをこれまでとは違ったふう考える。ぺてんは商売の原初的、かつ通常の状態であり、廉直は、上流社会において初めて可能なことなのだ。本来、定価というものには存在しない。商人は儲けることしか考えようとはしないもので、西欧における競争という、特殊な状況下においてはじめて、商人は買い手の心理という項目を割り引くことができるのだ。自明のこととして商人は、誰が、どのように欲しがっているのか、というように、客である買い手を勘定に入れる。取引に際して、商人にはそのつど、買い手と四つに組んで、価格を決定することが求められる。商談し、駆け引きをすることによって、商人は初めて品物の価値、つまり価格を突き止める。これが「ぺてん」ということであり、本来の自然な商いの基本なのだ。このような商人に比べると、西欧の販売業者は文明化された虚弱者であり、一種の公務員のような

ものだ。

工場の門を入ると、そこは別世界だ。近代的で広大な構内、軌道、パイプライン。明るい事務室ではタイプライターがカシヤカシヤ音を立てている。従業員たちは、男も女も、よい服装をして、あちこちを行き来したり、机に座っている。外では、——この工場だけで従業員が一、〇〇〇人を超える——レールが二マイルにわたって走っている。原油はポリスラフからパイプで送られてきて、加工される。大きなタンクに溜めて、予熱され、それから蒸留が始まる。大きな蒸留缶を目にする。ここではポーランド人、ユダヤ人、ウクライナ人の労働者が一緒に働いている。ある特殊な建物の内部では、白く軽いガソリンが蒸留管から噴出して、ガラスの向こうで泡立っている。別の装置では、曲折した導管から、重い油、軽い油、青い油と、それぞれの重さにしたがって、潤滑油が流れ出ている。それから、パラフィン蠟。ある建物では、通された芯の周りに流し込んで、ロウソクを製造している。残留物が蒸発乾固される。手に取ってみると、この軽い多孔性の炭はなんとも奇妙なものだ。炭であって、しかし炭ではない。これはきわめて可燃性が高いそうさ。

ポリスラフへ行つて、油が地中から出てくる様子を見たい。ドロホビチで一夜を過ごす。私を乗せた列車はゆっくりと、一時間近く走る。車輛の下では白髪のお乞いが、走ってくる列車に深々と頭を下げて、帽子を差し出している。風景がしだいに起伏に富み、今や、青や黒みがかつた塊がしだいにひしめくように、地平線に姿を現してくる。山、また山。カルパティア山脈とその丘陵だ。ポリスラフ駅の前には——たくさんの人々が勢いこんで降りてゆく——またしても御者がいる。泥沼のような本道を馬車が列をなしていつせいに走り出す。遮断機、カーブ、そして今度は——狭い、まっすぐな通り。そのぬかるみの中を馬車が行き来している。馬車の走りはすばやい。通りの両側では人々が、高い厚板の上に張り渡された板の上を歩いている。厚板の下には汚泥や汚物が流れ、

高い位置にある脇道からは、泥水が流れ落ちてきている。以前は、この水に油が浮いていて、貧しい人々がそれを集めていたのだ。町の中心部では人々が群れをなし、馬車が込み合っている。男たちは帽子をかぶり、きびきびと歩いている。ロシア語、ポーランド語、イディッシュ語の看板。粗末な木造の店で肉が売られている。牛がまるごと釘にぶら下がっている。古いみすばらしい建物の周りに足場が組まれ、瓦礫と板切れで通りがふさがれている。通りの両側には十歩おきに電信柱が屹立していて、その一本々々に白い磁器製磚子が鈴なりについている。まさに電信柱の森というところだ。その中を走る長いまっすぐな通りを、馬車に乗ったり、歩いて行く。山々の緑の斜面に、白く見えるところがある。私はそれを雪か、樹皮をはがれた木だと思っていたのだが、今、それが白い煙だと分かった。油井やぐらが立っているところの地面から、濃い煙が吹き出ているのだ。高さが家ほどもある、すらりとした木造のピラミッドのような油井やぐらは、もうこの通りのそばからぼつぼつと、あるいはまとまって立っているが、上の方では、緑の山腹の切り株の間に林立している。やぐらの周囲にある樹のこずえはすべて切り取られている。どっしりとしたやぐらの上からは、油送管が斜め下へ走っていて、長いロープの格納庫のようだ。山を上がり、やぐらのところまで行く。二五年まえに最初のボーリングが行なわれた。最初のうちは個人事業だったが、後にコンツェルンが事業を行なうようになった。それと同時に土地投機が始まった。ある人物が一山丸ごと買い占め、現在では全部がこの人の所有になっている。彼はそれを賃貸しして、収益の何パーセントかを受け取っているが、これが企業負担の大半を占めている。

油井やぐらのかたわらに、タール状の黒い溜まりがある。ボーリング孔からすくい出された、土を含んだ濃く重い原油だ。ここでは一、五〇〇メートル以上の深度までボーリングしている。ポーランドの石油はアメリカの石油よりも重く、聞くところによれば、その五〜一九パーセントがガソリン、三八〜六〇パーセントが灯油、五〜一三

パーセントがパラフィン、一五〜二五パーセントが潤滑油で、三〜六パーセントがタールになるという。一九〇九年には二〇〇万トンという途方もない量の石油が採掘されたが、その後、減少が続いている。現在は年間約七五万トンを汲み上げている。そして、掘削箇所はどのくらいあるのかといえば、約一、七〇〇箇所だ。しかし、この数字は変動している。産出量が減少し、毎年、三〇〇箇所が新たに掘削されている。どこにいても石油の臭いが鼻を突く。ボイラー室で石油を使うことはない。ボーリングにともなつて天然ガスが出るので、それで暖房するのだ。ボイラーの内壁を叩きつける火炎の勢いはすさまじい。時々、火災が発生する。この火炎は砂で消火しなければならず、それには勇敢な人々を必要とする。このことについては、とりわけ熟練したユダヤ人の専門家たちがいる。彼らは水に濡らした荒布袋を背負い、這つて火に近づき、砂で火災箇所を埋めるのだ。すぐそばのやぐらの屋台骨がみしみしと鈍い音を立てている。ボーリングが行なわれているのだ。設備は簡単なものだ。ボーリング孔からガスを導く配管、原油用の巨大なタンク、そして埋設された油送管があり、その中を、少し加熱された原油が蒸気によつてドロホビチへ送られている。約一二、〇〇〇人の労働者がこれらの施設で就労している。当地にはこの他にも、一五、〇〇〇人から二〇、〇〇〇人の関連業者が集まっている。

伐採された森を抜け、山を下りてゆくと、暗い空に星が輝き、山腹には無数の灯火が明滅しはじめている。そして、いたるところで轟音、どよめき。村では高い木の歩道を、小銃に着剣した警官が巡回している。蒸気自動車は車輪を破損して、道路を半ばふさいでいる。すごい混雑だ。それは、投機に浮かされた、目まぐるしい、開拓時代のアメリカ西部を思わせる。ぬかるみで立ち往生しているのは、アメリカの製品だ。人間の居住地ではなく、搾取の対象にすぎないのだ。所有者たちはここに住んではおらず、ウィーンかパリで、お金を湯水のように使っているのだ、この国のお金を。



夜、列車の中で、乗客たちが話しをしている。ある人は、ボリスラフに住宅がないので、ボリスラフとドロホビチの間を行ったり来たりしなければならぬ、それで、朝に出かけるときは、子供たちはまだ眠っているし、晩には寝てしまっている、とこぼしている。別の人は、利益配当金の大半を受け取っていた男の失敗を面白がっている。この男は投機に手を出して失敗し、今は零落の身なのだ。油井で儲けているのは誰だろう。取締役たち自身は有能な従業員で、大変な苦勞をしなければならない。今あるのは彼らの努力の賜物だ。だが、油井やぐらや土地の所有者が誰なのか、それで利益を得ているのが誰なのか、取締役たちも知らない。その変化は目まぐるしく、コンツェルンがつくられては解消されている。読み書きもできず、何も分からない所有者たちがいた。何度か投機に成功して、大金持ちになった。ある人がお金を手にして一番に思いついたことは、屋敷の家具調度を、<sup>(四)</sup>フランチ・ヨーゼフ皇帝のように調えることだった。

後にした暗闇の中では——電信柱の森はもうずっと後ろにある——電灯が明滅している。やぐらが立っている山々や台地は、小さな炎におおわれている。

### 訳 注

- (一) ボリスラフとトゥスタノヴィツェ ウクライナのリビウ(レムベルク)の南一〇〇キロほどのところにある小都市。一九世紀後半から、この付近で石油が採掘され始め、石油ブームが起こった。二〇世紀初頭には、世界の石油生産量の五パーセントを産出したという。
- (二) ドロホビチ リビウ(レムベルク)州の、人口約七七、〇〇〇人の小都市。近くのボリスラフなどでの石油採掘に伴い、石油会社がこの都市に集中し、石油産業が発展した。
- (三) ウーリー押さえの砦 スイスのウーリー州に、中世に造られた砦のこと。ウーリーに対する神聖ローマ帝国の支配を示す。フリードリヒ・シラーの「ヴァイルヘルム・テル」第一幕第三場参照。

(四) フランツ・ヨーゼフ皇帝 オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世(一八三〇—一九一六)。オーストリア帝国は第一次世界大戦まで東ガリツィアを支配していた。

### 訳者あとがき

本訳はアルフレート・デーブリーン著『ポーランド旅行』の第六章にあたる「油田地帯」の訳である。デーブリーンはレムベルク滞在中の一九二四年一月二十九日から翌々日の三十一日にかけて、レムベルクから南へ約一〇〇キロのドロフビチとその近郊の油田地帯へ出かけている。本編はその時の見聞をもとに書かれたものである。

ガリツィアのボリスラフで、一八五四年に地蠟が採掘されはじめた後、この一帯で石油産業が栄え、一九〇九年には、世界の石油産出量の五パーセントをまかなうまでになったという。それに伴い、仕事とつましい暮らしを求めて人々が集まり、人口の集中が起きたが、実際の生活は厳しく、この地域は「ガリツィアの地獄」という異名で呼ばれたという。

短い滞在において、デーブリーンは石油産業の最前線を視察し、また、そこで生きる人々の暮らしに眼を向けている。